

隣保館報

福祉と人権のまちづくり

発行 伊勢崎市立隣保館
伊勢崎市山王町 1422-1
TEL 0270-23-3461
FAX 0270-23-6487

人権のまちづくり講演会（オンライン開催 字幕入りです）

配信期間：8月19日（月）午前9時から9月2日（月）午後6時まで
配信期間中は何度でもご視聴いただけます。

演 題：「ちがいを楽しむ」

講 師：副島 淳さん（俳優・タレント）

申込み：8月1日（木）午前9時から9月2日（月）午後4時まで



下記URLまたはQRコードから申し込んでください。

申込フォーム <https://logoform.jp/form/Gpfu/592586>

お申し込み後、視聴用URLをご登録いただいたメールアドレスへ送信いたします。

※ 閲覧に関わるインターネット通信料は参加者様のご負担です。



オンラインでの視聴が難しい方のため、8月23日（金）午後2時から隣保館で視聴会を行います。申込は8月5日（月）からです。詳しくは隣保館へお問い合わせください。

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催

第42回全国中学生人権作文コンテストから

法務事務次官賞 受賞作品『 僕らは今を生きる 』

愛媛県 今治市立北郷中学校 3年 佐野 洸太郎（さの こうたろう）さん

去年の秋、僕の祖父は、アルツハイマー型認知症だとわかった。80歳の祖父は、高齢者の運転免許認定講習に行き、実技試験は合格したが、認知能力検査で不合格になった。僕たち家族は、年を取ったから物忘れがひどくなったのだと思っていた。僕は、祖父自身もそう思っているだろうと思っていた。軽い気持ちで病院に行ったが、そこでアルツハイマー型認知症だと診断された。僕たちは、驚き困惑した。口には出さなかったが、祖父自身が一番ショックを受けていたと思う。

それから生活は一変した。祖父は、病気の進行を遅らせる薬を飲むために、運転免許証を返納した。今までのように外出が自由にできなくなってしまった。僕の塾の送り迎えもできなくなり、僕は自転車で塾に行くようになった。

祖父は陶芸が趣味で、たくさんの作品を作り、たくさんの賞を取った。陶芸教室では、先生として生徒に指導をしていた。しかし、教室に車で通えなくなり、陶芸教室を辞めてしまった。「家にある陶芸場でも創作活動ができるよ。」と、僕は明るく勧めてみたが、祖父は、陶芸場にも行かなくなった。毎日、寝て、起きて、食べて、テレビの前に座って、また寝て、同じことを繰り返した。「外食に行こう。」と誘っても、行こうとしなかった。祖父の中で、何かが消えてしまっ

た。両親が働いていたので、僕は、小さい頃からすぐ裏にある祖父母の家で過ごすことが多かった。祖父は、優しくおおらかで、僕の願いを何でも笑顔で聞いてくれた。しかし、今の祖父は、何度も同じ話を繰り返す。昔話ばかりをする。僕は思わず「さっきもその話聞いた。」と迷惑そうに言ってしまった。祖父が認知症であると分かっているのに、祖父と話をするのが負担で冷たく接してしまう。それを見た母が「おじいちゃんは、今を生きる人になったんだよ。」と言って笑った。祖父は、数分前の過去を忘れて、今だけを生きている。そう思うと少し笑えて、それはそれでうらやましいとさえ思えた。祖母と口論になっても、その数分後には忘れている。覚えていようと腹が立つが、覚えていないから仕方がないと、祖母は苦笑いしながら、祖父にいつも寄り添っている。

ある時、祖父は僕たち家族に言った。「自分は、アルツハイマー型認知症だから、いつか皆のことを忘れてしまうかもしれない。もしも、それで皆を困らせる時が来たら、自分にかまわず、病院に放り込んでくれ。」と。その言葉を聞いて、僕は胸が締め付けられた。家族と別れなければならない時が来ることを覚悟している。その気持ちを考えると、とても切なく、悲しかった。僕たちは祖父の考えを知り、今後のことを家族で話し合い、協力して祖父を支えていこうと決めた。中学校の総合的な学習の時間に福祉体験学習が行われた。僕は『老人ホームでの過ごし方』という講座を選んだ。少しでも、祖父のことを知りたいと思ったからだ。そこで認知症の人の気持ちや接し方について学習した。認知症になった人は、自分が認知症かもしれないと自覚していて、自分が以前と違っているのが分かる不安になり、精神的にも不安定になる。それが、いら立ちや怒りとなって表れる。祖父が以前より怒りっぽくなったのは、これが原因だった。認知症の人は、昔のことをよく覚えているが、最近のことを忘れてしまい、理解ができないので戸惑いや疎外感を感じる。優しく「違うよ。」と声を掛けられても、「自分は間違っていない。」とプライドが傷つく。そのような時は、違う話題に変えて気を逸らすと良いなど、いろいろな場面に応じた高齢者への接し方を学ぶことができた。

福祉体験学習での学習を生かし、家族で祖父への関わり方を工夫するようになった。ほんの少し変えただけで、祖父も他の家族も笑顔で過ごす時間が増えた。あまり外出をしなくなった祖父が、6月にあった市総合体育大会の水泳競技の会場に、祖母と一緒に僕の応援に来てくれた。その夜、僕の県大会出場を祝って、家族全員で夕食を楽しむこともできた。

今、日本では高齢化が進み、様々な問題が起こっている。祖父との生活を通して、安心してみんなが暮らせる社会を作るためには、正しい知識を身に付けて相手を理解することが必要だと思った。そして、一人で抱え込むのではなく、家族や社会で協力し合うことの重要性を痛感した。

これから、祖父の認知症は進行していくだろう。それは、悲しく辛いことではあるけれど、受け入れなければならない。今後のことを想像し準備しながら、今を精一杯生きる祖父の話を笑顔で聞き、祖父との時間を大切に過ごしていきたい。



「隣保館報」…人権・同和問題を扱った記事を主体に年4回発行。人権・同和問題を見つめてもらうため、日常的な問題に焦点をあて市民の皆様へ理解と関心を高めてもらうための広報活動です。皆様の人権に関するあたたかいご理解をお願いします

